

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、語、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和7年11月25日(火)

みんなの居場所

徒然

私は休みの日にウォーキングをしています。距離は平均して10kmです。結構ハードですが、景色を眺めながらのウォーキングは発見も多く、楽しいものです。ランニングも考えましたが、年齢的、体力的なものから歩くという選択をしました。ウォーキングは有酸素運動ですから、我々の年齢からすると激しい運動を行うよりも体には良いようです。歩行中は30分おきに水分補給をしますが、その時に景色が良い場所であれば、何か得をした気分にもなります。

ある日のウォーキングは、立田山自然公園側から立田山山頂を目指しました。このコースは歩く距離は短いですが、勾配が急で結構息が上がります。それでも途中の道すがらウォーキングしている皆さんと挨拶を交わし、水分補給時に周囲の紅葉を見えるなど、心が洗われる感じがします。

立田山は私にとって「きつかった」思い出のある山です。高校時代持久走が立田山で行われていたからです。貯水池（配水池）コース、豊田コース（豊田秀吉を祀る祠があるためそう呼ばれていました）、頂上コースの3つのコースがあり、頂上コースは大変でした。殆どが上り坂ですからね。ウォーキングでは頂上からゆっくり下りながら、当時のことを思い出しました。「ここは近道だな」「ここ、この坂でこけたな」とか、数十年前の話なのに結構覚えていたものです。それだけ楽しい時期だったのかも知れません。当時はあまり気にもしていなかったが、立田山は林業に関する研究が行われていました。幾つもの区画に分けられ、様々な研究が進められていました。しかし最近別の問題があらわれてきました。それは「いのしし」です。あちうらにちうらに捕獲用の罠が仕掛けられています。

ただ歩くだけでなく、色々考えたり発見したり、充実した時間を送ることができます。ただ、冬はとにかく寒いですが、ウォーキングも億劫になってサボりがちです。今年からは頑張ろうって自分に言い聞かせています。

子ども達が生まれる未来社会④

今の子ども達の65%は、今は存在していない職業に就く。今後10〜20年で、雇用の約47%の仕事が自動化されるといった予測があります。どんな仕事が無くなり、どんな仕事が生まれるのかは、前回までにお話しましたSober50やAと関連があります。自動化される仕事は、職業としては存在しなくなる訳です。例えば、乗り物の運転や操縦はすでに自動化がかなりの段階まで進んでいますね。バスやタクシーは未来社会では無人のそれか走っているかもしれません。

「Sober50」ネット検索すれば多くの情報が得られます。その中でも紹介されていますが、先ほど紹介された無人運転、ドローンによる宅配、A+家電、A+スーパー、遠隔診療、スマート農業…、A+が私達人間に替わって多くの仕事を果たすようになるという訳です。便利な世の中になっていくことは間違いありませんが、予測困難な未来であり、そこで今の子ども達は生活し社会を支えていかなければならないのです。しかし、これだけ社会が未来型になったとしても、それを産み出し支えるのは生身の人間です。人々との「コミュニケーション」の中で社会を形成していくのです。

「Sober50」を迎える前に、私達は何を準備しなければならぬのでしょうか。私は主体性、協働性、創造性を身に付けることだと思います。府本小学校が目指していることそのものです。

シリーズ「自分を語る」#54

前回から続きます。この「落し」はナイトハイク当日に起こりました。玉名でのナイトハイクの移動はJRを利用していましたが、集合はJR玉名駅でした。集合時刻の30分前からほぼ全員集まっていたが、彼だけがいません。連絡もありません。どうしたのでしょうか…。職員有志に手伝ってもらって、彼の家に迎えに行きました。ここでの詳しい状況を書くことが表現が荒っぽくなりますので、控えさせていただきます。この時お母さんは私に「お前、先生、引退してからも連れて行ってください」と。私は困ってしまいました。でもお母さんの切なる願いだったので、涙を流しながらお願いされ、実際に引き連れて集合場所へ移動しました。移動する車の中でなぜ遅れたのか聞いてみると小さな声で「見たいテレビがあるから…」私は心の中で「ケマシ」。「なあに」という気持ちでしたが、冷静さをキープして「ケマシ」。「なあ、みんなの前で理由を伝え、待たせたことを謝るなさい。」「元気に」「と返事をする彼でした。ウーランドポイントの…。まだかまびかです。彼は集合場所までみんなの前には立ち

「彼は見たいテレビがあるから、ナイトハイクに行けなくなるかもしれない。」「他の子ども達は「ホカレン…」と、開いた口が塞がらない、何か起こっているのか解らない状態でした。ここで説得して引き連れて4人、195km歩く自信はないので、仕方なく彼を家に返し、1名だけ不参加での出発でした。行事そのものはスムーズに進み、事故やケガもなく終了しましたが、彼の「ケマシ」が気になりながら夏休みを過ごしました。

2学期の始業式の日、彼は学校を休みました。その理由は「ケマシ」でした。ナイトハイクに行けなかったため、先生に怒られる。またまた心の中で「ケマシ」は、今学期の目標を「彼を毎日学校へ引き連れて来させる学校を作る」としました。その日は諦めたが、次の日も同じ理由で欠席しつづけたため、私は学年主任に授業をお願いし彼のこともへ向かいました。母親とも連絡を密に取っていました。ここはスムーズに進みました。まさか私が毎日迎えに来るとは思わなかったらしく、3日間彼を引き連れて結果、彼はとうとう学校に来るようになりました。当然、不登校状態ではありませぬ。なぜ、登校しようと思ったのか？と聞くと、「ケマシ」でした。「先生に引き連れてくるのが痛いから。」「私はまたまた心の中で「ケマシ」でした。しかし、ここから卒業まで、彼はほんとに休まず登校するようになりました。

平成10年度の夏休み以降は、特に大きな事件もなく過ぎていきました。玉名町小3年目というところで、名前は結構知られていて、行事を楽しみにしている子ども達や保護員がいるこの情報もありました。有り難いことです。私は楽しいだけの行事なのに、それを楽しみにしてくれる人がいると思うと、力も湧いてきます。(つづ)